※インターネット「**はらまち九条の会**」で、「**九条はらまち**」の全号を見ることができます。

九条はらまち

「はらまち九条の会」ニュース **No. 91**

2009（平成21）年2月20日（金）発行

蕗の薹

<小林多喜二1903～1933> 小説家。秋田県生まれ。小樽高卒。『蟹工船』でプロレタリア作家の地位を確立。共産党に入党し、困難な非合法生活の様子を『当生活者』に描く。1933年2月20日、特高警察の拷問で虐殺された。昨年、小説『蟹工船』も映画も大ブレイク！

○「"闇があるから光がある。"そして闇から出てきた人こそ、一番本当に光の有難さが分かるんだ。世の中は幸福ばかりで満ちているものではないんだ。不幸というのが片方にあるから、幸福ってものがある。そこを忘れないでくれ。だから俺たちが本当にいい生活をしようと思うなら、うんと苦しいことを味わってみなければならない。」（『書簡集』より）

私の戦争体験 25

日赤の従軍看護婦として中国や南方の島へ

原町区三島町　鈴木増子

私は大正十一年九月、旧小高町生まれで、今年八十六歳になります。父は私が一年生の時亡くなって、小高小学校には五年生の一学期までいて、その後母の実家の原町に移りました。

水戸の日赤救護看護婦養成所に入学

相馬女学校に四年間汽車通学して卒業、水戸の日本赤十字救護看護婦養成所に入学しました。当時の看護婦は民間の病院勤務よりも軍隊に直結していて従軍看護婦の方が優先していました。

三年間で修了のはずでしたが、私たち第二十回生の三十四名は、昭和十六年十月、半年早い繰り上げの卒業になりました。アメリカとの大東亜戦争が始まる二ケ月前で、軍の上層部ではもう開戦を決めていたのでしょうか。

召集令状に飛びまわって喜ぶ

卒業式の後すぐに、日赤の事務所に卒業生全員で挨拶に行くと、「明日、召集令状を発送する」と参事に言われ、飛び上がって喜びました。翌日原町の自宅に帰ると、召集令状（赤紙）が届き、軍の病院船に乗ることができるんだと、嬉しくて嬉しくて家の中を飛び回ったことを覚えています。

昭和十六年十月、大阪の日赤病院の広い院庭に、全国から数千人の救護看護婦が集合し、部隊長が定められ、病院船に乗る人と、戦地に行く人に振り分けられました。私は茨城、栃木、群馬の人たちと一緒の班になり病院船に乗ることになりました。

「胡北丸」という病院船に乗る予定でしたが、その船がなかなか来ないので、大阪の寺町、大きな立派なお寺が並んでいましたが、そこで二十日間ほど待機していました。入口には剣付きの銃を構えた衛兵が両側に二名監視していて、すぐ目の前のポストにハガキを出しに行くこともできませんでした。

「胡北丸」という病院船で中国へ

その後、広島に移り、昭和十六年十二月はじめ、いよいよ病院船の「胡北丸」に乗りこみ広島から中国の大連に向かいました。大連は雪が降っていて三日ほど停泊。船は三千トンぐらいで、船の甲板も各部屋も病室もどこも真っ白に塗られ、三階建てになっていました。中国での戦争で怪我をした兵士や病気の兵士の患者さんを大連で乗せましたが、私の勤務は船底の結核患者ばかりの病室でした。そして大連には十二月末にもう一度行きました。

宣戦のラジオ放送は病院船の甲板で

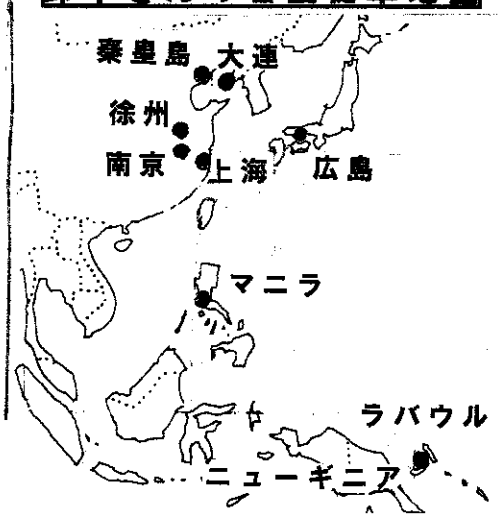
昭和十六年十二月八日の朝、私たちは「胡北丸」の甲板で全員ラジオ体操を終え部屋に戻ろうとしたとき、アメリカとの宣戦布告のラジオ放送を聞きました。開戦することは上の人たちだけが分かっていたのでしょう。私たちには病院船がどこにいくのか、傷病兵は何名かなどは秘密で、全く知らされませんでした。

次に上海に向かい、日本軍が占領した七階建ての大きな建物が病院になっていました。エレベーターもなくて、一階から七階までの往復や、重いベットを七階まで運ぶこともあり、大変不便な病院だったようです。

（裏の面に続く）

▲ 昭和15年、水戸の日赤救護看護婦養成所2年生の鈴木さん。（前列、左から5人目）

鈴木さんの看護従軍地図



第二萬四千七十九號

一機も多く

女ながら無念の涙

人道無視の病院船

白衣の天使鈴木増子さんの証言

誇りの野蓄新目標

▲病院船への米軍機の攻撃について、当時23歳の鈴木さん<写真>の体験を伝える貴重な新聞記事。昭和19年1月22日付『読売報知』の新聞コピー。

（表のページより）

さらに「アメリカ丸」で中国の北部の秦皇島（しんのうとう）に上陸しました。

アメリカと戦争しているのに「アメリカ丸」だなんておかしいね、名前を変えたらいいのに、などとお互いに話していました。船舶輸送司令部により改名は出来ないそうです。

秦皇島から汽車で揚子江（長江）を渡る駅に着き、船に乗って揚子江を横切り南京に着き、更に上海へ向かいました。上海の病院では看護婦は充分で、折角だから半分だけとのことで、なんとじゃんけんで、上海に残る組と徐州へ行く人とに分かれました。私は上海から徐州へ行く組になりました。

ブドウ糖を作り人体実験をする

徐州では病院のすぐ近くが戦場で、死亡者や負傷者が続出しました。地雷で顔面負傷の兵隊も多く、治療にも苦労しました。

患者に注射液として使うブドウ糖が不足しましたが補充がなく「現地で作成せよ」との総司令部の命令でした。

そこで白ザラメ糖でブドウ糖を作り、同僚の看護婦で男まさりの性格の小林栄子さんは自ら危険を覚悟して人体実験台になりました。悪寒に襲われ一時意識も失い、危うく命を落とすような実験でした。結局ブドウ糖作りは失敗で患者さんには使用はできませでした。

徐州での勤務は一年半ほどで、また上海の部隊と合流し、広島の司令部に引き揚げました。

遠くニューギニアのラバウルへ灼熱の砂浜で船を待つ傷病兵

次に向かったのは、日本から数千キロ離れた遠い遠い南の島ニューギニアのラバウルでした。日本から二週間もかかってようやく到着しました。

ラバウルの港といってもただの砂浜で、船は沖合に停泊し、陸地へはボートで行きます。ところが、傷病兵はその熱帯のじりじり灼熱の太陽が容赦なく照りつける砂浜に何日も置き去りにされているだけで、病院船を待っていました。病気や怪我をしているのに屋根もない酷暑の砂浜で、食べ物もなく、ミミズや虫を食べ、運が良ければ助かるという本当に悲惨な状態でした。

ラバウル出航の翌日、昼ごろ米軍機の機銃掃射の攻撃にあう

ラバウルを出航した翌日のこと、たくさんの患者さん、つまり傷病兵を収容して日本へ帰路に向かっていた「アメリカ丸」で昼食の準備中の時でした。遙か上空に爆音がしたかと思った途端、物凄い音響が甲板を貫いて、船体が急に傾きました。それは米軍のコンソリデーデットという攻撃機の機銃掃射でした。「空襲だー」と叫ぶ“医官殿”の声に、避難命令が下り、皆救命胴衣をつけボートに移る用意をして待ちました。でも敵機はあとの三発を海中に落としただけで、姿を消しました。

船の被害は甲板の一部とボート一隻だけで大したことはなくやれやれと思っていたら、今度は別の一機がマストすれすれに旋回飛行をしながらやってきましたが、やがて飛び去りました。私たちは従軍看護婦でしたから、強い気持ちで死を覚悟していたので恐ろしいとも思いませんでした。四回ほど攻撃されましたが、幸い大事には至りませんでした。

「畜生！」と悔しがる傷病兵

病院船には何の防備もなく、抗戦もできません。身動きできない重症患者には「ちくしょう、ひどいことをしやがる、日本ももっと飛行機があったらなあ」とベットの中で悔し泣きをしている兵士もいました。私も女ながらに思わず無念の涙がこぼれました。

やがて船はバタン島、コレヒドールを通過し無事フィリピンのマニラ港に到着。マニラでは四日間ほどいましたが、雨季だったのか毎日雨でした。患者を下ろし別の患者を収容して、さらに広島の司令部に戻ってきました。関西出身のの傷病兵が多く、いつも「エロウテ、エロウテ」と関西弁で言っていたことがおかしくてなりませんでした。「つらくて、苦しくて」という意味ですが、その時は変なことをいうものだなどと思っていました。

病気で原町に戻り終戦を迎える

ところが帰国した昭和十九年一月、私は検査で病気が見つかり、広島の陸軍病院に入院。まもなく原町の実家に帰って静養することになりました。新聞社の取材を受けたのは、その時のことで、昭和二十年八月十五日の終戦は自宅で迎えました。

ほかの同僚看護婦は、さらに中国の天津の陸軍病院に配属になり、六ヶ月後に召集解除になりますが、終戦まで一緒に勤務できなかったことは、私にとって「一生悔やまれること」です。

戦後は小中学校の養護教諭に

終戦後は水戸の日本赤十字病院に勤務し、院長のそばで看護婦長も務めました。三年後の昭和二十三年十二月一日から、今の原町区石神二小の養護教諭となり、以来五十七年三月の退職まで三十五年間、相馬地区の小中学校に勤務しました。

戦争は絶対してはならない、するべきではない。いいところなど一つもありません。私も「九条の会」に入会します。

（はらまち九条の会 新入会員）

○「私の戦争体験」の感想、あるいは原稿（400字原稿用紙４枚以内）をお寄せください。話していただいても結構です。